

栄美は高校の放送部に入った。中学生の時はいわゆるコミュ障で友達もいなかった。高校では自分を変えたいと思い、人前で話すことの多い部活を選んだのだ。

「思い切ったことをしちゃったなあ。大丈夫かな…わたし」

栄美は不安な気持ちを抑えられないまま放送部室(放送室)に足を踏み入れた。中は思ったより広い。そして、遮音されていてとても静かだった。マイクの置かれた放送機器の前にぼんやりと立っていると先輩が入ってきた。

「こんにちは。3の4の遠藤杠葉です。よろしくね」

「え、あ、私は1の4の刑部栄美です」

「おさかべさん？珍しい名前ね」

「ゆずりは先輩もあまり聞いたことがない名前ですね」

「え？あ、ああ、よく言われるわ…アハハ」

杠葉は一年生のくせにと苦笑いした。そこへ顧問の伸介先生が入ってきた。

「先生、新入部員がひとり入りました。これで安心ですね」

「おお、よく入ってくれたね。これで部が存続できる」

顧問の伸介先生は喜んで杠葉とハイタッチしていた。

この部活っていったいどんなことになってるんだろう？まさか廃部の危機？私はそんなところに入ってしまったの？どうしよう？すぐに辞めるわけには行かなくなってしまう。

「あの、先輩、ほかに部員はいないんですか？」

「え？ああ、もう一人いるわ。でも、いつ来るかな。誰も彼の居場所が分かってないから」

栄美は「ヤバイ部活」に入ってしまったと思った。そこに顧問の伸介先生が追い打ちをかけるようにこんな話をした。

「今年はコンクール地区大会を突破して上位大会進出を目指すぞ。アナウンス部門は強敵が多いからラジオ番組とかビデオ番組部門で行こう！」

「先生、私も部長として今年は頑張ります！」

「杠葉先輩って部長だったんですか？」

栄美は驚いたように言ったあとで、部員が各学年一名しかいないんだし、当然よねと思っ
て下を向いた。杠葉は明るく笑って胸を張った。

「そうそう、今年、新しく来た先生がYouTubeで動画編集に詳しいみたい」

伸介先生がそう言った。先生がYouTubeで栄美は少し驚いた。でも、関西の数学の先生
の動画がバズっていたのを知っていたので、すぐに「ああ、あんな感じかな」と想像した。
すぐに杠葉が尋ねた。

「その先生って何を教えるんですか？」

「国語って言ってたかな。でも、僕よりずっと年上なんだ」

「おじさん？お婆さん？どっちですか？」

「おじさん…だなあ？それ以上は僕の口からは言えない。ハハハ」

それから数日過ぎて、コンクール地区大会が迫って来たある日、杠葉は伸介先生と職員室
で言い合っていた。放送コンクールに出す番組の内容がお互いに納得できなかったのだ。杠
葉は自分が考えたシナリオで作りたいと訴えていたが、伸介先生がなかなか口を出さない
のだ。諦めて部室に戻ると珍しく和磨が来ていた。

「まあ、いいんじゃない？どうせ、入賞なんてできないんだし」

「和磨、あんたねえ、たまに部活に来て、えらそうなこと言わないで」

ほとんど幽霊部員の和磨が他人事のように話すのが杠葉は気に入らなかった。和磨はた
まに部室に顔を出す唯一の男子部員なのだ。放送部としては貴重な人材のだが、全く当て
にならない杠葉はいつも面白くなく思っていた。まして、今はコンクールも近く焦りもあ
あって、和磨の一举一動が杠葉の神経を逆なでした。

和磨はいつものように下手なフィギュアスケート選手みたいにグルグル回りながら、聞
いたことのない歌を歌っている。「いつ、ガチで邪魔だわ！」杠葉はそう思いながら和磨
をにらんだ。

「ねえ、アナウンス朗読はもう録音したの？」

「あ、昨日先生に提出しました」

「それじゃ、もう用はないでしょ？」

「ああ、それって早く帰れってこと？」

「さっしゅー」

和磨には腹芸は通じない。いつもストレートに言わないと。和磨はようやく理解して部室を出て行った。そこで、栄美が杠葉に話しかけた。

「先輩、ラストどうします？また、伸介先生にダメ出しされますよ」

「まあ、これでいいじゃん。レイは亡くなったミミシのことをずっと大事に思ってるって、見る人に絶対、伝わるはずよ。さっしゅーでしょ？」

「は、はい。私もさっしゅー思います」

「亡くなったミミシが靈魂となって、レイに寄り添って彼女のピンチを救つのです」

「めっちゃ、ロマンチックです」

そんな YouTuber の先生が姿を現した。その先生は手にチョコレートを持っていた。二人はそのチョコレートを渡すと「どうしました？」と尋ねた。

「なんか、伸介先生が私の考えた番組のシナリオが気に入らないらしくて…」

「さっしゅーですね。どんなシナリオですか？」

杠葉は自分の考えたシナリオを説明し、伸介先生が納得いかないラストについて詳しく説明した。新しく来た先生はしばらく黙ったまま話を聞いていたが、杠葉の説明が終わるとこんなことを言った。

「問題は…最後だね。ミミシが靈魂で出てくるのはいいと思うよ。でも、私なら…」

「先生ならどうしようするんですか？」

「うん、ミミシにね、もう私のことは忘れていいよって言わせるね」

「えっ？それって…」

「自分のことはもう忘れて新しい友達を作ってるって」

「……」

先生はそのまま出て行った。杠葉たちはお互いに見つめ合っしばらく黙ったままだった。

「第45回放送コンクール地区大会のビデオ番組部門、最優秀は西町高校放送部です」

杠葉たちがビデオ番組部門で最優秀を取ったのはそれから二週間後のことだった。発表された時、伸介先生と放送部員たちは手を取り合っ喜んで。そして、それから二ヶ月後に行われた上位の大会でもなんと最優秀賞を獲得したのだ。それは西町高校放送部にとって、

創部以来初の出来事で、校長も喜色満面だった。

新しい春が来た。杠葉は高校を卒業して、大学へ進学した。そして、栄美は二年生になった。

「杠葉先輩が卒業したら、私が部長になることになっちゃった…新入部員はいるかなあ」

「栄美先輩、私たち放送部に入りたいです」

「え？あなたたちは？」

「1年のここみと夕陽です」

「ホントに？ありがとうございます」

「新聞で最優秀賞取ったって見ました。先輩、ボクたちにいろんなこと教えてください！」

「う、うれしい」

もしかすると、私は変われるかも知れない、栄美は少しずつ自分が誰かに必要とされていることを感じ始めていた。